

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

78

被災地の現場に赴いた
びに人間の助け合いの姿
に心打たれます。災害を
経験した多くの方は「人
の温かさがわかった」と
言います。

阪神・淡路大震災の被災者で車椅子生活をする
進行性筋ジストロフィー
の女性は「震災を通し
て、人というのは助け合
えば生きていけるかなっ
て感じました」と述べ、
「人を助けるのは人」と
話しています。様々な人
が存在することを認め合
い、命や財産を守ろうと
する人々の尊い意思との
出会いや体験が「人を助
けるのは人」と言わしめ
るのでしょうか。

被災という大変な出来
事に遭った人たちが、そ
の方々の力になりたいと
思う人たちの助け合いの
姿に、私は人の持つ大き
な力をいつも感じるので
す。また、被災された

方々にも、ボランティア
として接する方々にもそ
れぞれの人生があること
をあらためて実感しま
す。

人は誰も辛さ、苦し
さ、悲しみを抱きながら
も、そのことを心の奥に
しまい込み、閉じこめ生
きています。思い起こし
たくない記憶に「呪縛」
されることもあります。
自分の中に沈み込んでい
る思いをすくい上げ、向
き合うことは容易なこと
ではありません。向き合
うには、十分な時間と気
持ちの整理を必要としま
す。

平成十九年に発生した
能登半島地震の被災地
で、私は一人の男性と出
会いました。「お墓の倒
れた灯籠を立て直すのを
手伝ってほしい」という
高齢の方からの電話。墓
石の復旧は危険を伴うの
で、ボランティアとして

はお手伝いできないとい
うのが原則ですが、高齢
の方でもあり、ボランテ
ィアさんを同行し現場に
行きました。

現場には七十代の男性
がいました。東京で五十
年間暮らし、地震が起こ
ったので二十年前に故
郷に戻ったとのことでした。
墓石を直し終えると
男性は話し出しました。
「ここに眠っている父親

方は目に涙を湛えていま
した。

そうした姿に男性は感
謝の言葉を述べられまし
た。「皆さんのおかげで
これまで伝えられなかっ
たことを、今日ここで伝
えることができました。
これで東京に帰れま
す。仲違いをしたまま
一生の別れをしてしまっ
た父に墓前で話し、語り
終えた安堵感からか、そ

でした。

これまでは「これで良
かったのだ」と自分に言
い聞かせてきましたが、
心の底ではいつも「そう
ではない」と感じていた
のです。私は今、二人の
子どもと接していると心
から幸せを感じ、「自分
がここに存在するのは何
故だろう。それは両親が
いるからではないか」と
自問し、そのたびに「こ
のままではいけない。父
に私が二人の子どもに恵
まれ今日があることを伝
えなければ」という思い

ある呪縛と向き合って

宮城県仙台市 北川 進

とは、二十歳を過ぎた頃
にぶつかり合い、家を出
するようになり東京に出た。
父親とは和解しないまま、
死に目にもあえず父
は逝った。今、私は自分
の父親が亡くなった年代
になり後悔ばかりが募
る」と言うのです。

東京での仕事、今の暮
らしなど、これまでの歩
みを延々と私たちに話し
たのです。私たちはただ
うなずきながら聞いてい
ました。ボランティアの

の高齢の方は晴れ晴れと
していました。

この能登半島での出来
事が、私の記憶の中に沈
んでいく父のことを思い
起こさせました。借金を
繰り返し、家を手放し、
祖母や母に苦労をかけて
きた父。六十代半ばの父

が募っていきました。
「父は今どんな気持ち
でいるだろうか。どんな
生活を送っているだろう
か。病気はしていないだ
ろうか」と思いを巡らす
と不安や心配に駆られる
のです。

不安や迷い、思いを文
字に書き表すことは、内
面世界を直視しなければ
なりません。そのことは
私が長い間の「呪縛」か
ら解放されたための試
練でもありました。今こ

の「エッセイ」と向き合
うことで、七年も会って
いない父に二人の子ども
を連れて会いに行きたい
という思いにたどり着く
ことができました。

父に対する感謝の思い
を伝えることができた
き、その報告をしに行き
たい山があります。五葉
山です。きっと誰にも負
けないくらい私にとっ
て、大切な山になるよう
な気がしているのです。

【執筆者プロフィール】
一九七三年生まれ。
宮城県仙台市在住、宮城
県社会福祉協議会みやぎ
ボランティア総合センタ
ー所長。防災ボランティ
ア活動検討会委員（内閣
府）、災害対応能力と地
域コミュニティの基盤・
機能に関する検討会委員
（総務省消防庁）、災害ボ
ランティア活動支援プロ
ジェクト会議運営委員
（中央共同募金会他）、ボ
ランティア・市民活動支
援実践研究会委員（全国
社会福祉協議会）、東北
文化学園大学保健福祉学
科非常勤講師。

「災害時における新た
な『地域の助け合い』を
災害ボランティアの視点
で捉える」ことなどをテ
ーマに多様にして多岐に
わたる活動に意を注いで
いる。

エッセイ



能登半島地震で被災した民家内の様子